

2009年7月21日

杉並区教育委員会
教育委員長大蔵雄之助殿
教育委員各位

ひらかれた歴史教育の会 代表 服藤早苗
杉並に居住する歴史学者の会代表 中村平治
連絡先削除

【教科書採択に関する要請】

扶桑社版『新しい歴史教科書』、『新しい公民教科書』および、自由社版『新編 新しい歴史教科書』を採択しないこと。

【要請理由】

[理由一]戦後の学問研究の成果を無視し、非学問的(非科学的)な記述がなされている。

私たち「ひらかれた歴史教育の会」が、杉並での採択後、扶桑社版教科書を検討し、全国の歴史研究者、歴史教育者とともに、その問題点を指摘し、『「新しい歴史教科書」の<正しい>読み方』(青木書店2007年3月)を発行したことは、貴教育委員会もご存知の通りです。この本に指摘したように、扶桑社版歴史教科書は、歴史学的に看過できない重大な欠陥をふくんでいます。また、自由社版教科書は、ごく一部の修正はみられるものの基調はまったく同じで、9割近くが同じ記述です。自由社版歴史教科書は、急いで検定を通すために作られたために、稚拙な誤字、誤植も目立ちます(添付の資料参照)。以下、両教科書の問題点を概略します。

(1) 過去の日本の戦争を正当化する教科書である。

扶桑社版ならびに自由社版教科書は、日露戦争の勝利を「植民地にされていた民族に、独立への希望をあたえた」、「日露戦争は、日本の生き残りをかけた戦争だった」と記し、日本の帝国主義化の足取りがアジアの人々に失望を与えた事実を隠します。また、「大東亜戦争」=アジア・太平洋戦争の記述では、アジアの独立のために、日本が犠牲的に行った、欧米諸国の覇権に対する大義の戦争であったかのような印象を与える記述となっています。

事実に目を向け、それを乗り越えて未来を志向するという歴史教育の基本を無視した教科書です。

(2) アジアの歴史への配慮を欠如した独善的な教科書である。

この点は中国や朝鮮に関する叙述において明確に表れています。両教科書の古代史記述では、「唐に朝貢していた新羅が、独自の律令をもたなかったのに対し、日本は、中国に学びながらも、独自の律令をつくる姿勢をつらぬいた」とし、独自の律令を作らなかった朝鮮は、日本より劣っているかのような叙述がこれに続きます。しかしこれは全くの間違いです。新羅の律令体制が唐に学びながらもどれほど独自のものであったかは、常識的な歴史事実です。

近代の叙述では、優れた文明を持っていたはずの中国さえも、西欧への対応を間違えたことが強調され、中国は世界の中心だという傲慢な中華思想を持っていたために、近代化に乗り遅れたという叙述になっています。それに対し日本は、武士が自己犠牲的な精神によって明治維新を成し遂げたとし、武士道が高く評価されます。武士の精神を、「公のために働くという理念」として捉え、そこに日本近代化の秘密を見るというのは、独善的できわめて陳腐な見解であると言わざるを得ません。アジアの一員として共に歴史を歩むという認識が、甚だしく欠如しているとしか言いようがありません。

杉並区には多くの外国人の子どもたちが居住しており、地域の公立学校で、日本人生徒と級友として学校生活を送っています。これらの教科書はいずれもそうした子どもたちを傷つけるばかりでなく、地域社会における人々の共生に目を背けた教科書です。

(3) 民主主義と日本国憲法を否定する教科書である。

この教科書は、戦前回帰の「神武天皇の東征伝承」などの神話をとりあげ、全編日本歴史の偉大性と「万世一系」である天皇制の正統性を強調しつつ、国家に殉じた「偉人」を褒め称えています。

歴史とは多くの民衆のたゆまぬ困苦と努力、そしてその戦いと犠牲の上に築かれていくものだというのは、歴史学の常識です。しかしこの教科書にあっては民衆のそうした決定的役割についてはほとんど描かれません。百姓一揆については具体的に記されていません。また、近代に入って自由民権運動期に起きた秩父事件を始めとする民衆の運動については全く記述がありません。自由民権運動も明治政府と異なるところがない運動であったとされます。こうした記述のし方は、日本における民主主義を築くための不断の努力を否定するものです。

また、扶桑社版公民教科書では、日本国憲法の否定がいっそう顕著であり、大日本帝国憲法への回帰を促す内容になっており、事実を歪める点では歴史教科書と同様です。

[理由二] 扶桑社版教科書は発行社自らが「内容が右寄り過ぎ」と認める欠陥教科書である。

扶桑社社長は07.2.26付で、「各地の教育委員会の評価は低く、内容が右寄り過ぎて採択がとれない」として、「新しい歴史教科書をつくる会」(つくる会)による教科書の作成の終了を宣言しました。発行社自ら欠陥教科書と認めたのです。また、教科書編集をした「つくる会」は分裂し、前会長(八木秀次氏)と現会長(藤岡信勝氏)の対立は深まり著作権をめぐる裁判沙汰となり、現在も係争中です。その結果、同一の「代表執筆者」による自由社版が出されたことは周知のとおりです。欠陥教科書である上に、対立と抗争にゆれる教科書を採択することは、杉並区教育委員会の責任が問われる重大問題です。

また、扶桑社は、採択当初、編集者が区内の学校を回って、修正すべき箇所などを聞いて歩いていたといえます。歴史学者、教育者からも多くの誤りが指摘されています。にもかかわらず、扶桑社はこうした声に応えず、訂正申請を行っていません。教科書出版社としても無責任はなほだしいとしかいいようがありません。子どもたちに誤りを教える、学習上の支障がある不適切な教科書です。

[理由三] 現場の教員の声を無視し、子どもの学習のマイナスになる教科書である。

多くの批判を受け、殆ど採択されない中で、対立と抗争を続け、同じ代表執筆者名で別の出版社から教科書が発行される背景に、教科書に名を借りた政治運動がある事は明らかです。そのような教科書を採択することは、結果的に杉並の子ども達を抗争に巻き込むことであり、厳に慎むべきでしょう。

かつて杉並区では、教員の声を生かした教科書採択が行われていました。しかしながら、教員の声を無視して、2005年に扶桑社版歴史教科書が採択され、現場に混乱がもたらされました。教科書準拠の問題集もなく、教員の負担も加重となり、中学生の学習にマイナスとなっています。扶桑社版・自由社版という政治的な思惑が優先されるような教科書とはきっぱりと絶縁し、子どもの成長を第一に考える賢明な判断を強く要請します。

以上、私たちは、事実を歪め、政治的目的のために出版された教科書とは絶縁し、教員の声を活かし、子どもたちに事実をきちんと伝える教科書を採択することを要請します。